

今村昌先生追悼

今村昌先生が2017年1月30日に逝去された。享年92歳。1980-82年度の日本放射線化学会会長である。容姿端麗、酒豪で同時に甘党でもあった。最後の別れの時、家族が棺の中に置いたのは、酒ではなく、晩年最も好んだと言うチョコレートであった。

今村先生は、阪大の千谷利三門下で、大阪市立大学を経て理研に入り、ボストン大学のリヒテン教授の下に留学の後、1966年から若手の新進気鋭の主任研究員として放射線化学研究室を主宰することになった。この研究室は、1960年に設立され、最初は千谷利三先生が、1963年からは物理の篠原健一先生が主任研究員を務められ、初期の放射線化学会の事務局が置かれていた研究室であった。日本では光化学が化学の中でようやく市民権を得た頃で、放射線化学はまだ揺籃期であった。光化学の方は光化学討論会という形で同好会的な運営をしていたのに対し、後輩の放射線化学は、日本放射線化学会を設立し、1966年には会誌の第1号を発行するなど、着々と態勢を整えつつあった。

私が1966年に理研のこの研究室に入った時、理研は駒込から和光への引っ越しの最中であった。私の最初の仕事は、フラッシュ・フォトリシスの装置の製作と、和光に建設されるヴァン・デ・グラフを用いたパルス・ラジオリシス装置の建設であった。普通の大学の研究室ではフラッシュ・フォトリシスでさえ高嶺の花なのに、その数十倍の予算が要るパルス・ラジオリシスなどは考えることも出来ない時代であった。和光移転に伴いさらに、共同利用機器として1万キュリーのコバルト60照射装置が設置され、また新サイクロトロン粒子線も利用できるという申し分のない研究環境が整いつつあった。放射線化学研究室は「金が無い、装置がない」という弁解は出来ないところであった。

今村先生は、ご自身は多様な線源を持つメリットを活かした「LET (Linear Energy Transfer) 効果」の研究をなさりながら、室員の力量に応じて、自由な課題で勝手に研究をすすめることを認め、なおかつ、そのための予算を確保する努力を惜しまれなかった。印象に残る一例は、志田忠正さんの低温マトリクスを利用した分子イオンのスペクトルの集大成である。今村先生は要請に応じて、当時家が一軒買えるくらいの値段のCaryの分光光度計を買い与えたが、論文の共著者になっていない。そのような度量の大きさが、研究室か

ら高い水準の成果がでた大きな要因の一つだと思う。高額な機器は共同利用を名目とする最大公約数的な決定がされていたこの時代にあつて、先生は主任研究員の大きな権限を非常に効果的に行使されたと思う。

和光に移って大型装置が稼働し始めてからのおよそ10年間で放射線化学研究室の黄金時代で、今にして思えば、我々は今村先生の寛大な大きな掌の上で元気いっぱい暴れまわっていたと言えよう。大学の研究室との交流も活発で、元気な若い人が大勢出入りして、研究室に活気を与えていた。さらに、このような交流は、少し大げさに言えば、日本の放射線化学の発展に貢献したところがあつたと思う。たとえば東大の田畑研との共同研究は、後に東大がLINACによる高性能パルス・ラジオリシスを建設する礎となった、などである。

北大の吉田宏教授が、1979年の放射線化学誌に、放射線化学の動向についての統計を発表された中に、1974年から79年までの今村の論文数は日本で2番目であるとの記載がある。最盛期はこの前から始まっていたことや、先生が共著者になっていない論文もあつたことなどを考えると、研究室としての実際の成果は、この目安の示すところよりもっと高いと言えるであろう。

今村研の論文は、世界の一流誌への掲載が多かつたことも付言しておきたい。理研では、当時日本では一般的でなかった外国雑誌への投稿料の支払いが認められていたこともあつて、今村研では外国の雑誌に投稿するのは当たり前であつた。今村先生は、論文の英語についても一家言あり、その集大成として「化学英語論文を書くための11章」という本を1987年に出版されている。

1978年に理研の太陽光エネルギー・プロジェクトがスタートしたが、先生はこれに積極的に参加するべく舵を切り、研究室は放射線化学研究室の看板を掲げながら、太陽光プロジェクトの化学系中核研究室となった。理研の方針によって、先生の退職を機に、研究室は太陽光エネルギー化学変換グループを取り込んで、それが主で放射線化学が従の構造に再編成されてしまう。

先生は主任研究員会議議長（簡単に言うと研究者のトップ）を何度か務められ、激しい変化の時代を切り

抜けるために苦勞をされていた。理研の外では、上述のように放射線化学会の会長をなさり、また1979年に日本で行われた第6回ICRR (International Congress of Radiation Research) 総会の会計担当委員をなさった。ICRRは放射線関係の広い分野を網羅しているのであるが、そこで放射線化学を代表する一人として、会の運営において大活躍なされたことを今も鮮やかに思い

出す。

先生の法名は釋常照 (本願寺派の法名は「釋」+漢字二文字)。光化学、放射線化学の研究者にはふさわしいと思い、お坊さんに伺ったところ、特に昔のお仕事を勘案してはいないとのことであった。人徳が滲み出たのであろうか。

(元 理化学研究所 吉良 爽)

志田忠正先生の背中と我々「弟子」たち

1981年暮れ、4年生のときに初めて連れて行ってもらった理研で、志田さん（「先生」より、理研風にこう呼ばれるのを好まれた。）と2人で実験をした。私は液体 He 温度での γ 線照射による ESR、彼は Cary 14 で吸収スペクトル測定。夕方、駅前の「あづま」での食事時、何も言わないでも瓶ビールを2本注文され、ふたりの前に一本ずつ置いて「酌をし合うような水臭いことはやめよう。アメリカ式だ。」と言われた。帰路、道端の自販機で夜用に缶ビールをまた買い、バンデ棟に戻って遅くまで仕事をした。私は外来宿舎だった独身寮に行ったが、志田さんは、時間がもったいないとそのままソファで休まれた。自転車を押す中野和城さんに案内されて、星空を見上げグランド脇から独身寮に向かったが、「志田さん、すごいですね。だって休まないんだもの。」と言われた。理研時代の野生の志田さんをちょこっと見たような気がして、この出張だけでも十分に教育的だった。

そして今年3月7日、届いた正式の訃報は、葬儀も全部済んでからだったが、偶然、めったに行かない理研の和光で受けとった。たまたま、東俊行さんの研究室の久間晋さんのところに行き、思いを打ち明けた。彼は最後のほうの弟子で、じかに接触した機会は少ないのだけど分かってもらえる。彼から連絡が回り、すぐ仙台理研の保科宏道さんからメールが来た。こうして「弟子たち」は、年が離れていても絆を感じている。

その日から2か月足らず、4月29日に追悼の同窓会が京都で開かれて旧知の面々が参集した。昨年7月に癌が見つかったから3月2日に亡くなるまで、事実は伏せられていたが、驚いたのは、その間の日記のような小冊子（遺稿集）が全員に配布されたことである。そこには志田さんの敬愛する先生方をはじめ「この世」との学術的かつ文化的な交流、様々な思い、最後の学会の出席の様子などが書かれていた。おしつけがましい教条は少しもなく、随筆のような流れである。原稿を託された加藤立久さんによると、配布リストまで用意しておられたとのこと。几帳面な科学者の、科学者としてのあっぱれな最期を見て、身が震え手本にしたとさえ思った。今もデスク脇に置きながら時々志田さんと話しているような気になる。なんだかんだと相変わらず導いてもらう「先生」であることには変わり

がない。

同窓会はしめやかに進行され、喧嘩相手(?)もしくは相方の赤坂一之先生のスピーチが寂しげだった。もともと「放射線化学研究室」と銘打たれた波多野博行教授の研究室（志田助教授、赤坂助手、六鹿宗治助手）だったが、雰囲気の良い、アカデミズムにあふれた研究室だったことを思い出す。数えてみれば志田さんの弟子と言えそうな博士だけでも、学会で活躍している人間は30名ほどになる。私は上から3番目くらい。多くの弟子の活躍の場は分子科学会で、期待される若い人たちが多数いる。修士課程の途中でも、学部卒でも分子研に技官ポストがあれば「僕のところなんかには居ないで環境の良いところに行きなさい」と中途退学を奨められた。その弟子たちは、なべて異なる分野で活躍し、研究内容が重なる人物はほとんどいない。日本化学会の賞を受賞したメンバーもいるが、推薦はしてくれても、政治力など絶対に行使してくれないので、自分のことは自分でするし、関もないし、志田さんのデッドコピーは一人もない。私はそうなる危険性がありそうだったので、早々に放り出してくださった。他の一門の方々からは、勘ぐられ誤解されそうな話だが、例えば、近年私が5年で60件くらい公募に応募している時期に、同門の人と最終候補になって失敗したことを報告したら「なんだ同士討ちか」とケロツと言われた。もちろん長年の付き合いで、私もその言葉を痛快に思い、勇気づけられた。

そのバラバラな弟子たちが参集すると楽しい。今回も一次会が終わって、年齢の近い10名ほどで、つもる話を続けた。トーンは全く大学院生当時のままなのに、教授が3人、准教授が4人で、今の日本のアカデミズムを支えている面々だ。みな志田さんの弟子というだけで、志田研で過ごした日々と教育内容に裏打ちされた似た者同士の一体感がある。

例えば、我々志田研の学生はゼミで量子力学の問題集をよくやっていた。例えば1983年頃、志田さんが新刊 (Johnson & Pedersen, Problems and Solutions in Quantum Chemistry and Physics) を全部コピーして、問題だけを切り抜いて貼りなおした冊子を自ら作成され、1年間で全問を学生7人で分担した。(冊子とレジュメは今も宝物) 毎週2問ずつ2コマで14問担当したのだけど、下調べとレジュメづくりに徹夜する

こともしばしば、随時ではあるが、後輩たちも同じ本をやっていたようだ。常に「基礎的な勉強は怠るな。」という口癖の教えは我々の身に染みっていて、現在の原動力でもある。志田さん自身の「基礎的な勉強」の成果としては、英訳もされた岩波講座の「化学結合」がある。

志田さんと放射線化学の関係は、もう誰も覚えていないかもしれない。それはそれでいいと思うのだが、もう一人志田先生（元東工大の志田正二先生：この方は逆に京大理学部化学のご出身）が居られて、よく混同されたいらしい。お二人が並んで話しながら仲良く歩いている珍しいシーンを1984年の東工大の討論会の時に見たが、その懇親会で佐藤伸先生の狂言回しでマイクが回って、学会のこれからが議論された。そこで放射線化学における理研（当時は太陽エネルギー研究に移行していた）の役割、というような話になって、今村昌先生から志田さんにマイクが回った。「理研の先輩として今村さんに言いますが、..」などと口走ったので、その場にいた波多野先生が誤解して立腹され、発言を引き取られた。理研は「一日でも早く入所したら先輩」だったので、お二人ともちっとも気にせず「？」の様子だったが、志田さんはその理研の雰囲気を楽しんでいた。2000年に木村一字さんをホストに討論会を理研で開催したときに、義理堅く今村さん、吉良さん、渡部力さんと一緒に懇親会に顔を出されたのをご記憶かもしれない。2010年5月に駒込理研の最後の建物（旧43号館）のお別れセレモニーにお誘いしたときにも来てくださって、ぼつねんと時間と空間を味わってくださった。その日、志田ファンを自認される元電話交換手のYさん（理研のアイドル）に誘われて3人で食事をした。先生に恩返しする機会があまりなかったことを今も後悔しているが、この日は少しばかりそうだった。なお、理研時代のエピソードは理研OB会誌第54号（2002年）にユーモアたっぷりにまとめられている。

私は放射線化学の基礎理論は大学院の講義で志田さんに習った。まだきちんとした教育体系ができていなかったと思うのだが、新実験科学講座の執筆時期とも重なり、非常にわかりやすかった。夏の学校などで他の先生方の講義を受けたこともあるが（申し訳ないが）理解は群を抜いていた。例えば、ハワイのIUPACで米国側の理論研究者から溶媒和電子がs型とp型だなんて発表があったときにも、反射的に「それはboundか？ continuumか？」などという質問を出された。井

口道夫先生との交流も続いていたから、放射線化学そのものに興味を失ったわけではなかったが、放射線化学討論会には参加されなくなった。

それは一言でいえば「センスのずれ」だったと思っている。要するに学会の内容が興味から外れたということだろう。数々の研究者がマトリックス法に追従するようになって、評価が高くなってきても、志田さんはお構いなしで、むしろ居心地が悪そうだった。例えば、私はESRを担当したが、志田さん自身はESRは専門外だし、不真面目なへなちょこ院生丑田とのタッグでは、名工試の岩崎万千雄先生のプロフェッショナルで精緻なアプローチにはついていけず、よく立ち往生した。でも、その頃はすでに志田さんは別の方向を目指していたように思う。

自分が火をつけたマトリックス法に、他の人が乗り込んできて、先生の理想や美学と違う状況が「学会の振興」として、称賛と引き換えに協調を要求されることに戸惑っておられた。量子化学の神髄を解明する仕事や、一目で新しいということが分かる仕事を目指しておられたから、細かい解析や議論を進めること、そのものは自分の仕事だとは思っておられなかったし、「論文になる」ラジカルイオン種の拡大再生産にも興味なかった。教授に就任されたころにはCryo-chemistry（低温化学）を目指すとはっきり言っておられたが、ご定年までその長い道のりの傍ら、加藤さん、百瀬孝昌さん、若林知成さんの活躍も含め、フラーレンのラジカルイオンや、基底四重項分子など、レベルの高い成果だけを重ねていかれたから、その選択に間違いはなかった、と思っている。

Elsevierから出たラジカルイオンの吸収スペクトルのデータ集も所蔵のデータの1/3か1/4しか収録されていない。すべての吸収スペクトルは長波長から順次光ブリーチされ、電荷の再結合が励起されてイオンラジカルが消滅するまでの実験が済んでいたから、不完全なところやスペクトル変化の怪しい点が少しでもあるデータはキャビネットの中で眠って終わってしまった。ときどき外部の方が議論をして、箔をつけようと意気揚々とデータを持ってきていたが、キャビネットに同じものがあると、「出すつもりはないけど、構わずどうぞ」などと「親切に」言われてしょげて帰って行ったものだ。志田さんとして誠意を尽くしても、欲も悪意もない孤高の「サイエンス至上主義」は、ある意味常識はずれで、多くの人に利己主義と誤解されたかもしれない。そうであれば残念な話である。

定年後、山田財団のお役目の他、神奈川大と神奈川工大で教鞭をとられ、厚木にもお気に入りの定宿があったが、第2の人生は少し自由で快適であったようである。関東はもちろん各地の研究会や学会に出向かれ、亡くなる半年前までお元気だった。自由で神出鬼没だったので、熊本の大火のときに屋根の上を走りまわっていたという晩年の宮本武蔵みたいになるのかな、と楽しみにしていたのに、病が見つかるとその事実を公表されず、出羽三山の入定僧のようにそっと自宅で亡くなる道を選ばれた。遺稿集は一番の朋友の吉良さんの訪問（2月8日）で締めくくられている。亡くなるまでお酒は辞めず、ワインを飲みたいだけ嗜んでおられたのは、どう考えても志田さんらしい。

志田さんの趣味は、中西悟堂仕込みのバードウォッチングで、ご自宅の庭に訪れる鳥たちをはじめ、周囲の山々など京都岩倉の自然を愛しておられた。遺稿集には「行く川の流れ」を見つめた鴨長明とご自分を重ねられたくだりもあるが、その姿は、高楊枝をくわえた侍だったのか、花鳥風月を見つめた吟遊詩人だった

のか、経文を手放さない修行僧だったのか、近くにいた「弟子」たちは、学生でもスタッフでも志田さんについていくのに七転八倒（苦勞）していた。でも、年月が経過していつの間にかそれを消化して同じことを実践している人もいる。「おいおい、君たちを弟子だと思ったことは一度もないよ。」と化けて出そう→出てきてほしいが、私が志田研を離れるときには「ぜひ、これからも、大切な友人で。」としんみり言われたこともある。そういうフランクでフラットな対応とサイエンスへの姿勢に我々は強く影響を受けている。「じゃあ」と志田さんはいつもの通り、手をあげ、くるりと背中を見せてあの世に向けて去って行かれたように思う。何かいい仕事をして、報告したかったのだが、もう届かない。背中が見えなくなった今、私たちは私たち独自の道を行かねばならないと戸惑うが、「なんだ、そんなことか。」という、いつものセリフが聞こえる気がする。先生、本当に有難うございました。

(北里大学理学部 丑田 公規)